

学友かわら版



国際ロータリー第 2770 地区 学友会発行
第 6 号 平成 28 年 7 月 10 日

目次

1. 「ロータリー財団設立 100 周年の年に思う財団奨学生としての意義」
1981 年～1982 年度派遣 国際親善奨学生
服部 純一 ……1
2. 「英国エジンバラ大学への留学・現在の生活・学友会のことなど」
1999 年～2000 年度派遣 国際親善奨学生
小池 剛史 ……3
3. 2016 年～2017 年度派遣奨学生候の紹介 ……7
4. 編集後記 ……8

ロータリー財団設立100周年の年に思う財団奨学生としての意義

1981～82年度派遣 国際親善奨学生
浦和西 RC 推薦 アメリカ・ノースカロライナ大学留学
服部 純一



ロータリー財団は、創設され 100 周年を迎えます。日本国内では 1951 年度奨学生で後に国連難民高等弁務官などとして活躍されている緒方貞子氏など、財団設立の主旨を体して活躍されている人材を数多く輩出しています。埼玉県内でも全県で 257 地区としていた 1973 年度以来奨学生として 400 名以上、GSE/VTT や米山記念奨学生などを含めると 800 名もの人材を世界に送り出してきました。

今回、2016-17 年度の学友会総会に際し、100 周年記念シンポジウムを開催することができましたが、シンポジストとしてご登壇いただく多田幸雄氏は経済同友会の委員長やご自身も東京 RC のメンバーとして活躍されています。また、浅見崇比呂氏、矢島裕介氏、柳生文宏氏、原田俊明氏も、それぞれ大学の先生として、専門分野の研究や人材育成でご活躍されています。

苦勞をした英語学習

私が奨学生試験を受けた時代、ロータリー財団には大学院課程・大学課程の奨学金の他に、専

門的訓練補助金・ジャーナリズム奨学金・教師奨学金という社会人が留学して更に高い専門性を身につけさせる奨学生部門がありました。私は、障害児教育に関する教師奨学生として推薦を受けたのです。

地区の選考試験の時、当時諮問委員をされておられた渡邊道夫パストガバナーから「君の英語は留学にはかなり難しいのではないか？」と言われたことに対し「私はこれまでも言葉の無い障害児に言語を教える仕事をしてきました。自分の語学に対しては自分で何とか力をつけるようにします。」と大見得を切ってしまいました。でも、実際は TOEFL も GRE もノースカロライナ大医学部の基準に満たず、当時は留学研修前に開設されていたロータリー英語研修所で、分からない英語の授業を分かる部分の英語から聞き取るという芸当に近い英語学習をすることになりました。

実際に自分で英語の語学力が伸びたと思うのは、ロータリー英語研修所が開設されてジョージアサザン大学で、元海軍の軍人だったというキャンパスボリスの方のホームパーティーに頼まれて寿司を握ったり、その噂から図書館の司書の方やプールの管理人さんなどのパーティーに呼ばれたりして、日本料理を作りながら放課後に沢山しゃべったことによります。ふと気がつくと、夢の中で日本の家族が英語でしゃべっていました。

大学町チャペルヒルで受けた親切

結局、私は専門的訓練部門の奨学生でしたので、ノースカロライナ大学本部が置かれたチャペルヒル RC の皆様のご尽力で、自閉症の臨床研究に必要な語学力を特別試験で評価し、客員研究員として処遇するという解決策で、医学部精神科の自閉症治療教育プロジェクトに入れていただきました。同じ年に UNC がロータリー奨学生として受け入れた留学生は、同じ自閉症プロジェクトにポストドクター研究生で来た、オーストラリア人の女性(写真左)と、マスコミュニケーション研究でインドから留学してきたジャーナリズム部門の新聞記者と、全員が専門的訓練部門の奨学生でした。



ノースカロライナ州チャペルヒルは大学しかない町ですから、ロータリアンも大学の教職員中心の大学関係者で、100 名近く集まる例会は、まるで教授会のような各分野の専門家の雰囲気でした。この写真もクラブに歓迎していただいた「チャペルヒル・ニュース」という地方紙の記事で、「TEACCH という自閉症治療研究プロジェクトにロータリー財団の基金で 2 人の若者が勉強に来ている」というような紹介記事でした。私のロータリアンカウンセラーは臨床心理学の教授。アドバイザーとして障害児教育の方や教育に関する分野のロータリアンが支援をしてくださいました。

ノースカロライナ大学はアメリカ独立から間もない 1789 年に創立された全米初の公立大学で、キャンパスや教育システムは伝統的な格調と近代的な先進性を併せ持った大学ですが、ロータリアンは極めて奉仕の精神を体現されている方々で、公私共に私の留学を支援していただきました。クラブの例会や行事はさながらサロンのような様相で、私の卓話も単なる日本の紹介だけではなく、日本人の意識と教育の方法について話してくれと言うリクエストが事前に出され、楽しい雰囲気の中にも結構踏み込んだ質問もいただきました。

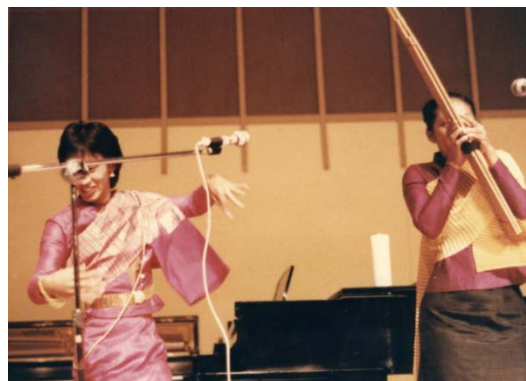
私が少しは貢献できているかな……と思うこと

留学後私は、障害児教育の現場でノースカロライナ大で開発された「自閉症・発達障害児の教育診断検査」の日本版を標準化して、研究上の師匠と共に出版しました。現在はその後継版が他の研究者によって開発され、発達障害児の教育に活用されています。また、今では特別支援教育の基本ツールとなっている「個別の指導計画」も帰国直後、日本特殊教育学会等で紹介や活用方法の発表を行い、普及させることができました。

私自身は、学校現場から障害児教育、とりわけ現在関心を持たれている発達障害への教育に関する専門家として仕事をさせていただき、RC の卓話などでも話させていただいております。また、小学校の校長として、ロータリアンと共に地域の教育力向上とコミュニティづくりにもお手伝いさせていただきました。ささやかな奨学生としての貢献のつもりで、越谷市内各 RC の国際交流活動にも参加させていただきました。

世界で活躍する学友

留学から10年後、私は文部省派遣教員としてタイに派遣されていましたが、ロータリー英語研修所で民族楽器の演奏とタイ舞踊を披露したチャンタナーさん(左)は当時タイ文部省の中堅官僚として既に活躍されていました。学友会は、ロータリー財団の育成された世界的な人材の宝庫です。学友それぞれの立場で、ロータリーの奉仕の活動に共に邁進するのが学友会の役目であると考えております。



「英国エジンバラ大学への留学、現在の生活、学友会のことなど」

1999年～2000年度派遣 国際親善奨学生

越谷RC推薦 英国エジンバラ大学留学

RI2770 地区学友会副会長

小池剛史

はじめに



遙か昔、中学時代に見た「三年B組金八先生」の中で武田鉄矢演じる金八先生が、卒業式後の最後のホームルーム時に次のような事を話しているのを覚えています。「日本という国は常に外国から文化を吸収し新たな日本文化を創造してきました。皆さん、これからどんどん外に世界へ飛び立って、新しいものに出会ってきてください」といったような内容でした。私たち学友たちは、かつてそれぞれが色々な目的を持ち留学に旅立ち、そして帰国し、今日本で働く方々もいれば、あるいは海外で活躍する方々もいます。留学の形は十人十色ですが、それでも「その国でなければ経験し得ない何かを経験する」ということは、どの学友もが味わう留学の醍醐味ではな

いでしょうか。私が留学した1990年代後半は、奨学金の名称がまだ「ロータリー財団国際親善奨学金」(Rotary Foundation Ambassadorial Scholarship)であり、「国際親善大使」(Ambassador)としての役割が強調された時代でした。そのため、私たちは常にロータリアンや学友の先輩方から「君たちは留学地で日本の文化を紹介し、また留学地で現地の文化を身に付けて帰国し、それを日本のロータリークラブで紹介するのだ」と教えられ、またそういった意識が奨学生同士の間でもありました。そのために、高いレベルの外国語能力が求められたのです。「国際親善」という要素が奨学金名から外されて「地区補助金奨学金」「グローバル補助金奨学金」となった現在でも、私は「親善大使」としての役割は財団奨学生にはあるべきだと思っています。そして学友の役割の一つは、そういった意識を持った奨学生候補生たちを育てることであると自覚しております。

以下に、まずは私自身の留学の中でどのような経験をし、どのような「文化」を身に付けたか、それをどう日本の中で活かそうとしているかを記したいと思います。「学友かわら版」第一号で私は現地ホストカウンセラーより沢山のスコットランド民謡を教わった話を書きましたが、今回はエジンバラ大学での経験に触れます。最後に、これから学友会の在り方についての拙論を述べたいと思います。

留学時代の仕事—チューターとして、教員として—

私は越谷 RC のご推薦を頂いて1999年～2000年度の財団国際親善奨学生(候補生)となり、1999年9月から英国スコットランド、エジンバラに留学し、エジンバラ大学文学部英語学科に在籍しました。英語史、特に古英語(Old English:約500年～1100年頃の英語)の文法の分野で、修士号及び博士号を取得し、2004年8月に帰国した。結局現地には5年間滞在することになりました。

このエジンバラ大学で私は研究活動を行うのみならず、生まれて初めて教員の仕事を体験することにもなりました。英国の多くの大学と同じように、エジンバラ大にはテュートリアル(tutorial)という制度があり、学部学生は最初の1、2年次に10名くらいから成るテュートリアル・グループという小グループに振り分けられます。そのグループ単位で、専門必修の講義科目の内容を確認するためのゼミのようなクラスに出席します。そのクラスをテュートリアルといいます。テュートリアルのクラスを担当するのは、学科の専任教員全員と院生数名です。私は留学して3年目からテュートリアル担当教員、すなわちチューター(tutor)となりました。学生はほとんどが英国人であり、彼らを相手に、日本人である私が、彼らの言葉である英語に関する授業を担当するのです。今考えると、よくこんな仕事を受け持ったと我ながら感心(?)します。今の私ではとても出来ないだろうと思います。ただ、丁度日本人であっても、日本語学の専門家でなければ日本語について深く知っている訳ではないのと同じように、英国人であっても英語について深く知っている訳ではありません。だから、英語学という学問は、別に英語が母語でなくても教えられるのです!

テュートリアルのクラスでは、学生が必修の授業で学ぶすべての分野を扱います。分野は、文体論、統語論、音韻論、社会言語学、英語史など多岐に渡ります。未知の分野も多かったため、予習に多くの時間を割きクラスに臨みました。どうしても英語が外国語であるというハンデは大きく、私のクラスを履修した学生には私が彼らの英語(特にスコットランド人学生の話すスコティッシュ・イングリッシュ)が中々理解できず、相当迷惑をかけたことと思います。この仕事は博士課程を終えた後も一年間続け、合計三年間行なったが、何とか最後には、学生たちから感謝の言葉

を添えたカードを頂けるくらいの授業が出来るまでは上達したのかなと思っています。

このチュートリアル制度は、学科全体で取り組むことが重要です。学生の受ける必修の講義科目は 5, 6 人の専任教員が担当し、それぞれ自分の専門分野を講義します。しかしチュートリアル・グループは学科の専任教員全員で担当します。その為、学科の教員は、他の教員の講義内容をきちんと把握してはなりません。もちろん学部の1, 2年生が学ぶような内容なので高度に専門的というわけではありませんが、それでも分野によっては特殊な内容もあり、チュートリアルを受け持つ教員と院生が全員集まって、授業内容についての勉強会を開かなくてはならないこともありました。学科の専任教員がそれぞれ専門分野を持ちながらも、1, 2年生に教授する基礎的専門知識だけは全員が把握しているということ、これは海外の大学では当たり前なのかも知れませんが、このような学科の在り方は、私の現在の日本の大学での仕事への意識に大きく影響を与えていると思います。

私は留学最後の半年間、学科のある専任教員の在外研修の穴埋めとして専任教員にして頂きました。そのためその半年間は、その教員が持っていたチュートリアルのクラスを追加で担当するだけでなく、卒業に関わる重要な試験の採点にも関わることとなりました。英国の大学での試験はほぼ全て論述式です。試験を受ける学生は、2時間くらい試験会場に缶詰状態になり、そこでひたすら手書きで論述します。答えは 10 ページ近く。その採点の仕方は、一つの科目につき必ず二人の教員が採点し、すべての答案に自分の点数を出します。教員同士点数を見せ合い、大体点数が同じ場合にはその点数の中間点で決定。点数が大幅に異なる場合には、その答案の長所短所を論じ合い、何とか折り合いをつけるのです。私はいくつも自分の専門外の分野の試験の採点に関わりました。何度も「こんな点数の付け方で良いのか」と自問自答しながら自分なりの点数を付け、他の教員と論じ合ったものです。しかしここで身に付けたもの、それは、必ず二人の教員が答案に目を通すことで、採点に透明性、公明性を持たせることです。私は他の教員と学生の答案について議論する中で、その教員の持つ専門知識から多くのことを学んだだけでなく、採点する際にその答案の強みと弱みを根拠を以て示す習慣を身に付けることができた。

エジンバラ大での経験を日本の大学でどう活かすか

現在私は、東京都・埼玉県両方にまたがる私立大学の英米文学科で専任教員として教えております。日本の大学はどこも同じかも知れませんが、学科の教員は他の教員がどのような講義をしているか殆ど知りません。特に私の学科には英文学者、米文学者、英語学者がおり、それぞれの分野はその担当者が教え、学科全体で共通の内容を教えるということは、もちろんありません。私は、教育に携わる教員同士がある程度共通のベクトルを向き、共通の知識を持っていることは大切であると思います。ところが、私の大学は1, 2年と3, 4年でキャンパスが異なり、それぞれの教員の出講日もバラバラなので、学科の教員が一同に揃うのが週に一回だけです。しかもその週一回の日に限って様々な委員会が設定されており、落ち着いて同僚が顔を合わせる時間も非常に少ないのです。このような状態では、1つの科目の試験を二人で採点することなどは論外で、1, 2年生に教えているような基礎的な内容を教員同士で共有することなどまず出来ません。

それでも私は教員同士の情報の共有は大切であると考えており、何か出来ないかと思案し、「英米文学科かわら版」なるものの発行を提案しました。年に一回であるが、各教員がそれぞれ

の授業での取り組みや講義内容、また学生との対応などをA4で1～2ページ程にまとめ、それを一冊の冊子に束ねたものを年度終わりに発行し、学科の全教員に配布するのです。発行といっても、コピー機で印刷したものを人海戦力でホチキス留めをただけですが……。今年で第6号が出たところです。

日本の大学教員は多くが1時間以上かけて通勤し、場合によっては他大学での非常勤として勤める場合もあり、非常にゆとりがありません。私はエジンバラ大のような理想に近付けたいと思いますが、このような状態で、更に何か新しいことをしようとするれば、更に縛りがかかり、今以上にゆとりがなくなります。そうであれば、今の仕事の仕方のままでも情報を共有できる仕組みを作るしかありません。そう考えて始めたのが「英米文学科かわら版」でした。こんなことを続けても、とてもエジンバラ大のような理想には至りませんが、こういった活動を土台として今後何か大きな変革ができるのではないかと密かに願っています。また、私は自分の学科の同僚たちが皆、学生を愛し、教育という仕事を愛し、自分の専門分野を愛する仲間であることを知っており、誇りに思っています。このような仲間と共に良い教育を行い、良い人材を日本社会また世界に送り出したいと願っています。そのためにも、お互いの持っている情報と想いを、無理のない形で共有することが大切です。

こんな風に、エジンバラ大で一つの仕事の仕方を身に付けた私は、現在の大学で、その理想は心にいつも持ちつつ、現在の環境の中でまず実現出来ることから始めようとしている。

最後に～学友会の在り方～

最後に学友会について拙論を述べたいと思います。

私は学友会幹事の一員とし、この会を纏めていく立場にあります。冒頭にも書いた通り、私たちはロータリー財団から奨学金を頂き、留学地で得られた、そこでしか得られない経験を持ち帰り、それをこちらのロータリアンの方々や学友同士、またこれから留学する候補生たちに伝える義務がございます。そしてそれは絶えず発信し続けるべきだと思っています。

と同時に、私は学友の皆様方が帰国後様々な環境の中でお仕事をされ、生活をなさっていることを強く意識しています。このような私たちが継続的に学友会活動するためには、私は、学友が現在のそれぞれの仕事や生活の形態を大きく変えることなくできることを行うべきだと思っています。

その一つがこの「学友かわら版」です。このような紙面であれば、それぞれの学友が自分の都合の付く時間に、自分の場所で、情報を発信することができます。この紙面に掲載されたものは、RI2770地区の財産となり、これから留学していく若き奨学生候補生たちへのメッセージにもなります。実際、「学友かわら版」に投稿して下さった学友の中には、その話を膨らませた形で奨学生候補生のオリエンテーションの際にご講演下さった方もいます。

新たな「学友部門委員会」委員長となられた名古屋誠様、現学友会会長関根裕子様、学友会次期会長候補(この紙面を皆様が読まれる頃には正式に会長になられていると確信する)服部純一様を始め、多くのロータリアンの皆様、多くの学友の皆様のご協力を得て、本日学友によりシンポジウムが実現するに至りました。昨年7月の学友会総会後の喫茶店での非公式の茶話会(?)の中で、それまで学友会幹事会が温め続けてきた「学友によるシンポジウム」について、鈴木五郎先生がその実現に向けて強く背中を押して下さり、服部様がこれを受けて、学友部門

委員会のご協力を得て、パネリストの皆様との連絡を続け、本日の開催に至ったのです。このようなシンポジウムは学友会の誇りある活動であり、今後もぜひ定期的につけていきたいと思っています。こういった大きな活動が出来るようになるためにも、私たち学友は常に横の繋がりを保っていかなくてはなりません。絆が安定して保たれていれば、何か大きなことをすることができます。そして、継続していくためには、お互いに無理のない形でなくてはなりません。その絆を保つ手段の一つとして、「学友かわら版」を続けていきたいと思っています。

細く、されど長く、そして着実に、学友会の活動を続けて参ります！

皆さま、どうか「学友かわら版」の編集担当者から執筆依頼があった折には、ぜひ快くお引き受け頂きますよう、お願い申し上げます！

本日の総会ならびにシンポジウムの盛会を心より祈念しております。そして、RI2770 地区学友会がこれから少しずつでも大きくなっていくよう、引き続きご協力のほど宜しくお願い致します。

2016年～2017年度派遣奨学生を紹介

ロータリー財団地区補助金奨学生

坂本麻由里（さいたま新都心 RC 推薦）



皆さまはじめまして、坂本麻由里と申します。この度はロータリー財団の財団奨学候補生として選んでいただき、ありがとうございます。私は女子美術大学、大学院で日本画を学び、自身の制作活動と並行し個展や美術館での展覧会やボランティアスタッフなどの活動を行ってきました。これらの経験を通して、作品コンセプトのしっかりした美術には人々の心を動かす力があると強く実感してきました。そして私自身、今まで絵を見た人の心が安らぐような作品作りをモットーに制作を続けてきました。今後も制作活動を継続していく事で、不安感の漂う現代社会で生活する人々の心の平和に美術の分野

から貢献していきたいと思っています。

そのためにも伝統を重んじる芸術の都、オーストリアのウィーン美術応用大学で研鑽を積み日本画の可能性を研究したいと考えております。この度の留学を通し、美術のみならず海外の人の思考や文化を知る事により、日本画及び日本人固有の感覚や文化を新たな視点から捉え直したいと思っています。また日本画独自の画材である岩絵具や無形文化遺産にもなった和紙を使用した作品を海外で発表する事により、日本と海外の文化交流にも貢献出来るよう努力したいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。それでは行ってまいります。

小野 恵（浦和西RC推薦）



皆さんはじめまして、2016年～2017年度財団地区補助金奨学候補生の小野恵と申します。私は現在東京都内にあるIT企業にて勤務しており、2017年1月よりオーストラリアのグリフィス大学院・インターナショナルビジネスに入学予定でございます。

現在多国籍の方が働く職場にて、職場環境改善業務を行っております。職場環境を改善する中で、様々な国の社員より相談・お話を聞く機会があります。その中で、私だけでは解決できない問題、困難、発見が毎回あります。なかでもジェンダー問題について考えさせられることがあり、日本の中で生きてきた私には考えもつかないような相談を受けたことがありました。その問題について、何もできない自分に無力さを感じ、何かできることはないかと模索していた時、多国籍の大学院にて再度学びたいと思うようになりました。入学予定である大学院での専攻分野は、貿易・人のマネジメントについて学びます。また、学校外では地域のロータリークラブと積極的に関わりを持ち、異文化交流を行っていきたく思います。そして、将来的には、大学院にて学んだ経験を基にフェアトレード商品の普及、商品開発、女性の社会地位の向上に貢献できる職業に就きたいと思っております。

現在は、留学準備に追われている毎日ではございますが、現地大学院でも勉学の遅れをとらないように、日々英語の学習も行っております。渡豪については、大学院の定める留学生用のプログラムを受講する必要がある為、9月末を予定しております。帰国した際に、皆様へ成長した姿を見せられるように現地では頑張りたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

学友かわら版第6号をお届け致します。

毎年度の如く、発行が遅くなってしまいましたこと、お詫び申し上げます。本来でしたら、今号の終わりに掲載した候補生のお二人が第一回オリエンテーションを終えた頃に、「新しい候補生です！」と小紙でご紹介差し上げたかったところですが、「行ってらっしゃい！」の時期となってしまいました。何はともあれ、坂本さんと小野さん、世界に広く羽ばたき、それぞれの留学地でしか経験出来ないものを経験し、そのことを帰国時に報告して下さい。学友全員で応援しております。

今号には、学友会次期会長職をお引き受け下さった服部様にご投稿頂きました。1980年代ですと、現在の奨学金制度とはおろか、私の時代(1990年代後半)とも制度、環境が大きく異なり、大変興味深いです。記事の中で触れられている、服部様の選抜試験の際の渡邊道夫パストガバナーとのやり取りを読み、選抜試験のような緊張する場面でも堂々と見栄を張れるような度胸—もちろんそれはご自分のそれまでの長い経験に基づく自信があつてのことですが—は、これから受験する方々にもぜひ持っていただきたいと思えました。これから会長としてご活躍される服部様には、是非ともこれから旅立つ若き候補生たちに厚く指南をして頂きたいと思っております。

最後となりましたが、2016年7月の総会を以て、これまで学友会会長を2期に渡って務められた関根裕子様引退となります。2011年11月の学友会総会での会長就任からもう4年半、この学友会の運営にご尽力下さいました。この場を借りて、関根裕子様に御礼申し上げたいと思っております。今後は学友会顧問として、私たちを見守って下さいますよう、宜しくお願申し上げます。

（「学友 かわら版」編集担当） 小池剛史